

名古屋の古道・街道

池田 誠一

【3】美濃路…古渡から伝馬町通へ

1 東と西を結ぶ道

日本の東と西を結ぶ道、今で言えば関東と関西を結ぶ国土の大動脈は、ほとんどがこの名古屋地方を通っています。

古代から現代まで、西は関ヶ原(不破関)か鈴鹿峠を越えて。また東は海岸沿いか木曾・美濃の峠を通して。そのルートを選び方は時代によって違いますが、今日的高速道路、新幹線に至っても変わっていません。

鎌倉・室町時代は、鎌倉から海岸線を通り、濃尾平野を斜めに抜けて関ヶ原から京に向かう鎌倉街道でした。江戸時代に入って、東は同様の海岸沿いでしたが、西は新たに七里の渡しを設け、鈴鹿峠を越えるルートに変わりました。

しかし古くからあった関ヶ原を越え濃尾平野から海岸沿いを結ぶ道は、関ヶ原の戦い以降、家康や家光の上洛の折にたびたび使われ、重要な街道になりました。この、西の中山道と東の東海道をつなぐ道が今回の「美濃路」です。

2 名古屋を貫通する幹線道路…美濃路

(1) 美濃路の概要

美濃路は東海道などの五街道と並んで、早々と宿駅が設けられました。東海道の熱田宿(宮の宿)から分れ、名古屋、清須、稲葉、萩原、起、墨

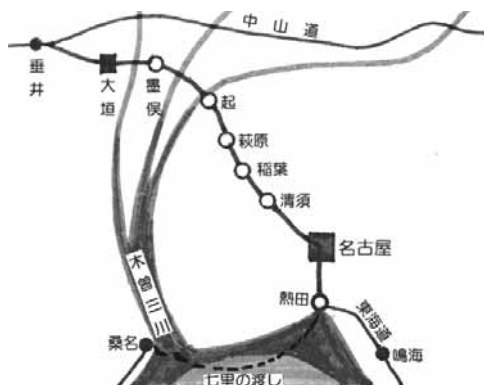


図1 美濃路(熱田～垂井)

俣、そして大垣の7宿を経て垂井で中山道に合流する14里24町余(約58⁺里)の街道です。(図1)

この街道は、東海道の付属街道に位置付けられ、幕府の道中奉行の管轄下に置かれました。各宿場での継ぎ立ての人馬も50人・50疋と中山道と同じであり、五街道に並ぶ重要な街道だったといえます。

この道筋には、名古屋、大垣という城下町の中の宿場がありました。とくに名古屋宿は御三家の城下であり、通常の宿場とは異なり、本陣、脇本陣もなく、人馬を継ぎ立てする問屋場もここでは伝馬会所と呼ばれました。五街道等の宿場は通常幕府の管轄でしたが、名古屋宿はしばらく藩の管轄だったり、とにかく特別な宿場だったようです。

(2) 名古屋の美濃路

熱田宿を出た美濃路は国道19号を北上し、金

山を通り、古渡を過ぎて右に。本町通に入り、大須、広小路を通って伝馬町通へ。ここに名古屋宿がありました。街道はここで西に曲り、堀川の伝馬橋を渡って北に、さらに西に曲って市北西部の枇杷島橋にぬけました。まさに名古屋を縦貫する街道でした。(図2)

けれども熱田から城下までの道は、城下では本町通と呼ばれ、また熱田道とか名古屋道といわれることも多く、城下の人には美濃路とはお城の西側からと思われていたのかもしれませんが。

3 古渡から伝馬町通へ

それでは国道19号の下になった部分避け、国道と分れる古渡を越えた所から北に、伝馬町まで美濃路を歩いて見ましょう。

出発は地下鉄の東別院駅が便利です。西に歩くと東本願寺名古屋別院の大きな建物があります。この寺の大きな敷地は昔織田信秀が古渡城を築いた跡です。(信長はここで元服しました。)高台で、前を鎌倉街道が通るといい立地でした。別院の大きな境内の左手に、古渡城址の石碑が立っています。

その西門を出て2本西の通りが本町通、すなわち美濃路になります。この国道から分かれるあたりは橘町といい、名古屋城下の南口としての大木戸が設けられていた所です。

城下のはずれで、江戸時代の初め頃はまだ家もなく、千本松原と呼ばれた刑場がありました。そしてここで、1664年キリシタンの弾圧により200人余の宗徒が斬罪になったのです。本町通を少し北へ行った右手に栄国寺というお寺があ

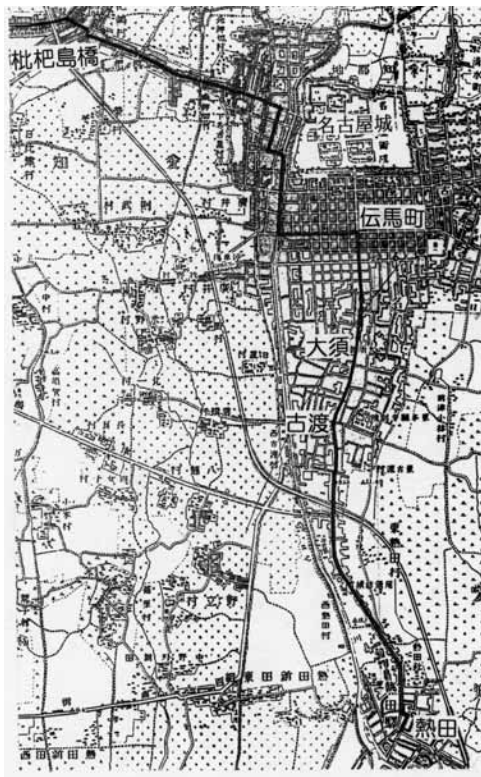


図2 市内の美濃路(明治21年)

ります。そのお寺の右手奥の細い通路を潜り抜けると、昼なお暗き一面に慰霊碑が並んでいます。その後刑場は枇杷島の土器野に移され、跡に建てられた寺には、今は切支丹遺跡博物館が併設されています。

芝居小屋があったのもこの付近です。東側、橘町裏と呼ばれた所(今の愛産大工高付近)で、七代藩主宗春のころは隆盛を極めたといえます。

*

街道に戻り、北へ向かうと通りの両側には仏



古渡城址(東別院内)



橘町、大木戸のあった付近から本町通



昼なお暗き栄国寺、切支丹遺跡

壇を売る店が並んでいます。東別院と、この先の西別院、大須観音へとつづく道は、信者の行き交う町だったからだそうです。

街道の両側は昔は大きな寺町でした。東西の別院や大須観音をはじめ、清寿院、総見寺、万松寺、性高院等々、通りの一本裏手は五千坪を越える大きな寺で埋まっていた。(図3)

大須を過ぎると100^坪道路の若宮大通に出ます。渡った右手に若宮八幡宮があります。この神社は城下のできる前に三の丸の位置にあり、那古野神社と分担し、現在地に名古屋総鎮守として、尾張徳川家の氏神に奉られました。

街道は、完全なビル街のなかに埋まります。少し行くとゆるくカーブし、わずかな下り坂になります。すると行く手のビルの谷間には高速道路が無ければ天守閣が…と思わせる光景に出会います。

通りを少し行くと広小路通に出ます。この右手前に江戸時代には牢屋があり、紫川が流れていたことなど全く忘れられてしまいました。

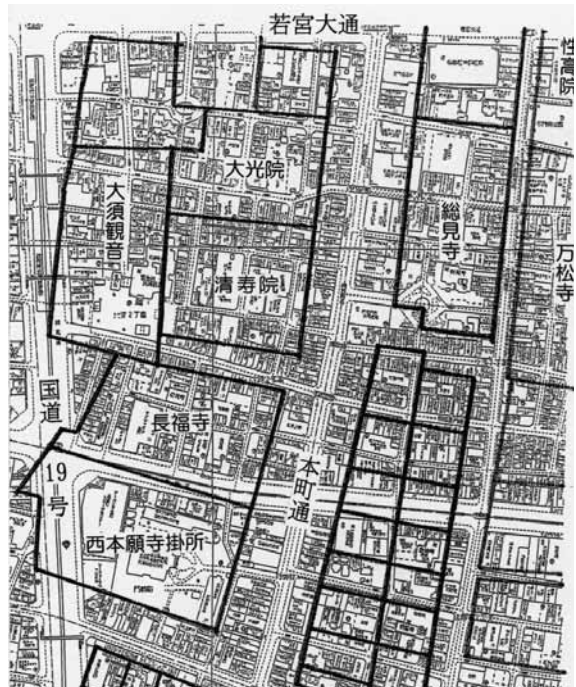


図3 大須付近の寺町(文献③による)

*

広小路通からお城までは、**碁盤割地区**と言われ、約60間四方に区切られた区画が9×11、規則正しく並んでいます。その南のはずれの堀切筋は1660年の大火の後、幅を15間に広げられ、広小路と名づけられました。その広い空間が見世物や商売の場所として大変な賑いになり、今日の広小路通に発展したといえます。

ここからは、さらに深いビル街になります。この本町通は戦災でほとんどが焼け野原になりました。昔の面影はなく、(広小路通りの朝日神社の不浄よけは江戸時代の物といいます。)区画正しい街路と通りの名前にかすかな名残をと



本町通につらなる仏壇の店



若宮八幡宮



本町通より名古屋城の方向を



伝馬会所、高札のあった札の辻の交差点

どめるだけになってしまっています。

しばらくビル街の中を進むと、桜通りの一本手前の伝馬町通本町の交差点に着きます。ここには伝馬会所があり、高札場が置かれたため札の辻と呼ばれました。名古屋宿の中心地であり、美濃路はここで西に曲ります。江戸時代には名古屋の中心ともいえる所で、東や北に向かう街道の出発点でもありました。

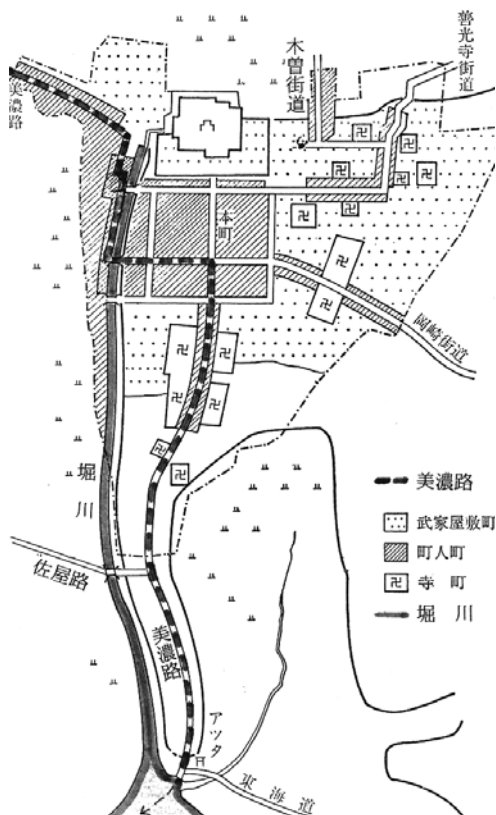


図4 名古屋城下と美濃路(文献③に追加)

4 家康の街づくり

名古屋城は、関ヶ原の戦いの後、豊臣方に対する備えとして、家康自ら決断し、指揮して築城されたことは良く知られています。

しかし、同時に家康は城下町づくりにも意欲を燃やしたのです。人口7万人の清須を町ぐるみ移させたり、城下の整地等にも全国の大名を狩り出したりと、家康でなければ出来なかったことがいくつもあります。

とりわけ画期的なことは、商業と物流の重視でした。城下の一等地、表玄関の前に前述の碁盤割の商人街をつくり、また物資輸送のために6キロ余もの運河を掘らせ、川端にも商店をはりつけたことです。(図4)

交通計画も大胆でした。東海道、中山道と結ぶために、美濃路を城下の中央にひき入れるとともに、熱田へは真直ぐな道をつくり、庄内川には橋をかけることを許したのです。このような当時の常識とは逆のことが出来たのも、平和の時代を見通し、都市の繁栄にも重きを置いた家康の政策があったからではないでしょうか。

美濃路が、城下に貫通することによって、名古屋の街はどれだけにぎやかになり、豊かになったか計り知れません。

街道も ビルの谷間に 春かすみ

<参考文献>

- ① 日下英之「美濃路」
(愛知県郷土資料刊行会 1985)
- ② 新川みのじ会「美濃路」
(ブックショップ「マイタウン」 1997)
- ③ 芥子川津治「家康がつくった革新名古屋」
(地産出版 1977)